ちほの
おしゃべりタイム

心を紡ぐコットン

オフィスPrima 代表
フリーアナウンサー
ビジネスマナー講師
透（とおる） 千保（ちほ）

東海地方の各放送局（岐阜放送/ぎふチャン、FM GIFU、東海ラジオ、メ～テレなど）で数多くの番組やニュースを担当。司会、ナレーションの他、名鉄電車、名古屋市営地下鉄など、公共交通機関のアナウンス放送に携わる。
一方、企業・大学において、ビジネスマナー、電話応対などの研修講師を務め、人財育成に取り組んでいる。

お気に入りのシャツやニットに使われている、シーアイランドコットンやスーピマコットン。繊維がとても長く、シルクのような光沢とカシミアのような柔らかさがあります。でも日本にも、そうした世界の高級綿に負けない味わいを持つ和綿があるのです。和綿の栽培は、江戸時代から明治時代初期にかけて各地で盛んに行われていましたが、輸入品に押されて衰退して行きました。ところが今、和綿のよさを見直し復活させようという動きが全国で広がっています。

和綿は外国産の洋綿に比べて繊維が短いことから、紡績糸を作るのは難しいと言われています。しかし、弾力があり、その棉（わた）を紡いだ糸で織ると、通気性や保温性に優れた布が出来上がります。有機農法で栽培することで、人にも環境にも優しい製品が生まれます。

『tomoniつながる和綿プロジェクト』は、2016年に岐阜の地ではじまりました。和綿（国産の綿）の種を蒔き、育て、糸にし、ものづくりを考える試みです。一昨年、県内の紡績工場の協力を得て岐阜県産の和綿100％の糸から作られた生地が完成。マスクなどの小物や、スーツ、ワンピースが製作されました。そして昨年は、他の地域で作られた有機和綿との混合糸でより高番手の細い糸が出来上がると、ニット生地や植物染色を得意とする企業が参加し、多くの製品が生み出されています。さらに、県と友好交流協定を結んでいるリトアニアの亜麻（リネン）と和綿（コットン）を紡ぐ交流の糸も生まれました。

このプロジェクトの総括ディレクターである古田菜穂子さんによると、こうした試みを実現するには、将来ありたい姿から逆算して、いま何をすべきかを考え行動することで目標を成し遂げる「バックキャスティング（backcasting）」の考え方が重要だとのこと。持続可能な目標設定（SDGs）や、企業の経営にも通じる考え方だと思いました。

長期的なプロジェクトは、種を蒔いてから花が咲き、実を結ぶまでに時間はかかるかもしれませんが、その過程に意味があるのだと思います。今回のプロジェクトは、製品開発を通して、アート・デザイン・ビジネス・福祉・農業など多くの分野の方々の心が紡がれ、それぞれの強みを生かしたモデルにもなっています。岐阜県産和綿100%の生地は、関係者の熱い想いが織りなす布なのです。

3月20日（日）には、和綿を通して持続可能な未来を考えるシンポジウム「～未来へのGIFT・for a sustainable future～」が、ぎふ清流文化プラザで開催される予定です。着ている服が植物から作られていたことをすっかり忘れ、モノの「命」に対して無頓着になってはいないか。丁寧に生きるとはどのようなことなのか。暮らし方や人とのかかわり方を見つめ直すきっかけになりそうです。